

共同体の基礎理論

大塚久雄 著



岩波書店

共同体の基礎理論

大塚久雄 著

岩波書店

共同体の基礎理論

一九五五年七月二五日 第一刷発行
一九七〇年五月一三日 第二八刷改版発行
一九七九年八月一〇日 第三〇刷発行

定価六〇〇円

著者 おお 塚久雄

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋三十五
発行所 緑 岩 波書店

電話 三三六四二
振替東京六二六四〇

印刷・理想社 製本・誠光社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

共同体の基礎理論

大塚久雄 著

岩波書店

改版にさいして

一 このたび版を改めることになったので、誤植その他を訂正し、引用書を正確にしたほか、読みやすくするために言葉づかいも或る程度改めた。しかし、内容上の変更はまったく行われていない。

二 第一版の「はしがき」でも触れておいたように、本書は元来、東京大学大学院社会科学研究所経済史専門課程で一九五二年度および一九五三年度におこなった講義の草案にもとづいて、講義用テキストとして作成されたものである。第一版の本扉に「経済史総論講義案」という副題が付されていたのも、まったくそのためであった。しかし、それからすでに一五年を経て、著作自体としても、また著者にとっても、この副題はもはやほとんど意味をもたなくなつたように思われるので、第二版からは削除することにした。

三 本書にはもともと、やや大げさに言えば、資本主義以前（したがって、社会主義をいちおう除けば、資本主義以外）の諸社会構造について、その経済学、少なくともその理論的骨組の一部を作り上げてみようという意図が秘められていた。課題の大きさに比べて自己の能力がいかに小さいかを十分に知ってはいるけれども、そうした意図はいまでもまったく捨て去ったわけではない。したがって、事情が許すかぎり、なお少しづつ書きつづけていく心算である。

一九七〇年二月十五日

大塚久雄

第一版はしがき

一 この書物は、筆者が東京大学大学院経済史課程でおこなっている経済史総論の講義の草稿の一部である。印刷にさいしてある程度の加筆をおこない、また傍注と最少限度の参考文献を追加したが、もとよりきわめて簡単な素描であり、暫定稿にすぎない。

二 筆者の研究上の興味は、十数年前と同じく、現在でも依然として資本主義の発生と発展の歴史にむけられているが、資本主義の発生と発展の過程は、他面からみれば、古い封建制の崩壊の過程であり、そのなかに「共同体の解体」という重要な一節を含んでいる。したがって、資本主義の発展史を研究しようとするばあい、われわれはどうしてもこの「共同体の解体」の問題を避けてとおることはできない。このばあい、もちろん「共同体」とはさしあたって「封建的共同体」すなわち「ゲルマン的共同体」にほかならぬが、それにしてもそうした共同体の究極的な崩壊を論ずるためには、まえもって、どうしても一度ひろく、およそ「共同体」なるものの本質、成立と解体の諸条件を総体として、少なくとも理論的に見とおしておく、必要が生じてくる。筆者はそうした意図から、この書物で、「共同体」に関する諸理論のうち、経済学の立場から納得のいくと思われるものを素描的に紹介し、かつ、試論として、筆者なりの仕方で整理しなおしてみたのである。したがってこの書物における叙述は、顔はあくまで経済史の方をむいているが、本来どちらかといえば経済理論の研究系列に属せしめらるべきものであると思う。また、筆者としても、そうした性質の試論的素描として受けとっていただきたいと願っている。なお、このテーマに関しては畏友川島武宜氏をは

じめ、高橋幸八郎、松田智雄などの諸氏から直接間接いろいろな御教示をえた。ここで御礼を申し述べておきたい。

三 岩波書店の厚意でこの講義草稿ははからずも公刊されることとなった。同書店の編集部諸氏、また原稿の浄書や校正その他に協力された北条功、諸田実、岡田与好の三氏および大学院学生諸君に感謝の意を表したい。

一九五五年六月二十一日

千駄木町の寓居にて

大塚久雄

目次

改版にさいして	三
第一版はしがき	五
第一章 序 論	九
第二章 共同体とその物質的基盤	一四
一 土地	一四
二 共同体	二三
第三章 共同体と土地占取の諸形態	三七
一 アジア的形態	三七
二 古典古代的形態	五九
三 ゲルマン的形態	八一

第一章 序 論

一 この経済史総論の講義では、さしあたって経済史の研究および叙述のために必要な基礎的諸概念および理論の概要を説明し、諸君とともに考え、われわれの研究の進展に役立てたいと思う。ただし、そのような基礎的諸概念および理論は主要な部分だけでもかなり多岐にわたるのであり、とうてい一年間で終ることはできないと思われるから、おそらく毎年少しずつ問題の焦点を変えながら続けられることになるであろう。

ところで、具体的な論述に入るに先立ち、この講義の性質について一言注意を促しておくことにしたい。この講義では、いまま述べたように、経済史の研究および叙述に必要な基礎的諸概念および理論の概要を説明することになるであろうが、その際われわれは決してあの『Pokrusesbeiti』のあやまちを犯さないよう十分に注意したいと思うのである。たとえば「適用」という語などが時にわれわれにそうした錯覚をおこさせることがあるが、この講義で説明される諸概念や諸理論をいわば「鑄型」のようなものと考え、総ての史実を何でもかんでもその中に流しこんでしまうようなやり方を、われわれはお互いに固く戒めたいと思うのである。それは、この講義の内容が未熟であつて多くの訂正の必要が想定されるということだけではない。理由は一層深く基本的なものである。というのは、われわれの用いる諸概念や理論はそもそもも限られた史実を基礎として構想されたものであり、つねに何らかの程度で仮説(Hypotheses)に過ぎず、したがつてまた当然に一層豊富な史実に基づいて絶えず検討しなおされ、訂正あるいは補充され、再構成されねばならない。およそ、どのようなものであれ、歴史の理論は抽象という手段によつて史実という母胎か

ら生まれて来たものだからであり、母胎である史実（したがって現実）は理論よりもつねにはるかに内容豊富なものからである。われわれは歴史理論のこのような本来的な性格をつねに念頭に置いていたい。

もちろん、そうだからといって、経済史の研究にさいして、基礎的諸概念や理論に関する一定の、またできる限り正確な予備知識なしに、いきなり錯雑をきわめた史実の森に分け入ろうとすることは、おそらく燈火なしに暗夜の道を行こうとするほど困難であり、場合によっては不可能とさえなるであろう。実際、経済学上の基礎知識なしに、たとえば資本主義発達史の研究に立ち向うならば、どのような結果になるかを想像してみるがよい。およそ経済史の研究を進めるに際して、基礎的諸概念および理論に関する一定の、またできるだけ正確な知識があらかじめ必要であることは殆んど自明であり、また、そうだからこそ、この講義も計画されたのである。ただし、この講義では事柄の性質上、こうした方面ばかりが一面的に強調されているような誤った印象を諸君に与える危険も考えられるので、とくに以上のことについてあらかじめ言及しておいたのである。いま一度比喻をもっていつてみれば、地図は現実の地形にもとづいて作られたのであって、現実の地形が地図に従って作られたのではない。もし両者の間に、いちがいが見出されるならば、地図の読み方が正確である限り、もちろん訂正されねばならぬのはつねに地図の方であって、地形ではないはずである。この講義で説明される基礎的諸概念や理論は、いわば諸君が史実の森に分け入ろうとすればあいに携行すべき、そのような地図にすぎない。そうした意味合いでこの講義を聞いてもらいたいと思う。⁽¹⁾

(1) したがって以下の諸注における参考書目の提示は、必要な典拠の引照以外、一般の聴講者諸君がこの講義と並行して比較的簡単に読み進める程度のものだけに限った。

二 さて、この講義では論点をいちおう「共同体の基礎理論」という問題に限定することとしたい。周知のように、すでに過ぎ去った悠久な世界史の流れのうちには、アジア的、古典古代的、封建的、資本主義的および社会主義的と

よばれる生産様式の継起的な諸段階が存在した。ところで、そのうち封建的生産様式の崩壊、他面からいえば、資本主義的生産様式の発生という変革点を境界として、世界史はある意味で大きく二つに分けることができる。というのは、この変革点を境界としてそれ以前の生産諸様式は、それぞれの特殊性はあるにもせよ、いずれも根底において「共同体」Gemeindeとして編制され、その上に打ちたてられていたのに対して、それ以後の生産諸様式はそうした「共同体」的構成を全く欠いているという決定的な相違を両者の間に見出すからである。この認識は当面経済史の研究にとつてきわめて重要な意味をもっている。たとえば、次のことがらに想到するとき、そのことは十分に明らかであろう。封建的生産様式の崩壊と資本主義的生産様式の展開という局面(いわゆる「資本の原始的蓄積」die ursprüngliche Akkumulation des Kapitalsの基礎過程)は、この観点からすれば、そのなかに他ならぬ「共同体」の終局的崩壊という事実を重要な一環として含んでいるからである。そしてわれわれも、この講義において、結局はこの「共同体はどのようにして崩壊したか」という問題に焦点をしばっていかねばなるまい。しかし、それには相当の準備が必要である。そこでわれわれは、まずさしあたって、ひろく「共同体」一般に関してその本質、その諸形態またその成立と崩壊の条件などという諸論点について一わたり述べてみることから始めたいと思う。しかもそのばあい、くれぐれも断つておくが、何らか斬新な見解を提出するなどというのではなく、従来の諸学説のうち權威があると思われるものを、ただ私なりに整理し要約して提示するに過ぎないのである。

なお、あらかじめ、ここで「共同体」Gemeinde⁽²⁾という語の用語法について、一、二の点に注意を喚起しておきたい。この語はわれわれが通例見聞する範囲でも、さしあたって広狭や異なった用語法をもっている。一つは「共同体」という語をとくに無階級の原始共同組織という意味での「原始共產態」Urkommunismusとはほぼ同義に考える用語法である。たとえば、階級分化にともなつて「共同体」は崩壊した、などという用語例のばあいがそれである。しかし

この講義では、いま一つのかかなり広い用語法によっている。すなわち、そうした「原始共同体」ursprüngliche Gemeinschaftとの歴史的連関をもそのうちに含めながら、いつそう広く、その後封建社会の終末にいたるまでの広汎な期間にわたってつぎつぎに継起する生産諸様式——もちろん階級分裂をそのうちにはらむ——の土台あるいは骨組を形成した「共同組織」Gemeinwesen全般を問題とするのである。⁽³⁾たとえば、研究史上すでに周知のアジア的な、古典古代的な、およびゲルマン的な「共同体」諸形態について考えてみよう。それらの「共同体」はどれも論理的に、またある程度までは現実的にも、初発における無階級状態を想定させる。しかし、やがて自己の内的必然性によって階級分化をひきおこすとともに、そのあとはかえってそれ自身そうした階級関係を支える土台あるいは骨組に転化し、そしてそれぞれの生産様式の崩壊にまで及ぶのである。こうした意味における「共同体」が資本主義以前の生産諸様式においてもつ地位は、論理的には、資本主義的生産様式において商品生産および流通という基礎規定がもつ地位に對比することができよう。⁽⁴⁾ともかくこのような用語法のばあいには、単純に、階級分化にともなって「共同体」は崩壊する、などとはとうてい言うことはできない。この講義におけるわれわれの用語法はこの後の広い意味におけるものである。実際また、この用語法によるのでなければ、「原始的蓄積の一面面としての共同体の崩壊」などということが全くの無意味におわることも、ほとんど説明を要しないであろう。⁽⁵⁾

(2) この講義では「共同体」はGemeindeの訳語である。これに対して、Gemeinschaftには「共同体」Gemeinwesenには「共同組織」の訳語をあてることとした。

(3) 私の見たかぎりでは、後に引用するマルクスのばあいにも、ヴェーバーのばあいにも、「原始共產態」を指すのには「共同体」Gemeindeでなく、「共同体」Gemeinschaftの語が用いられているように思われる。といへども、「共同体」Gemeindeが「共同態」Gemeinschaftと全く別物であると考えられているわけではない。少なくとも、後者は前者の本質的な一面としてつねに何らかの程度においてそのうちに含まれているとされているのである。いま一つ「共同組織」Gemeinwesenという語はそ

れらすべてにひとしく使用されているとってよからう。それらの用語の意味合いについては、行論のうちで失うに説明されるはずである。

(4) 『資本論』第一部、一〇九頁以下、第三部、九三六頁以下(頁数はアドラツキー版による、以下同じ)を参照。

(5) 以上は後に詳論するように Karl Marx, *Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen*, Dietz Verlag, Berlin, 1962 を貫く用語法でもある。たとえば A. a. O., SS. 27, 33 f. (マルクス、飯田貫一訳『資本制生産に先行する諸形態』岩波書店、四〇頁、五二頁以下)をみよ。

第二章 共同体とその物質的基盤

一 土 地

三 「共同体」とは、いったいどのような社会関係であり、そしてまた、どのような物質的基盤の上に立つものなのであろうか。われわれはさしあたって、きわめて一般的に、このような問題からはじめなければなるまい。

そして、まずその手がかりを、経済学の研究成果のなかに求めることにしようと思う。もちろん、経済学の本来の研究対象は近代の資本主義社会——その内部的編制および運動の法則——そのものであるが、しかしそうした対象の分析と説明を通じて、経済学は資本主義以前の諸社会の基本構成をも資本主義社会との対比において照し出すという成果を、いわば副産物としてあげているからである。そうした成果のうち主要なものとして、さしあたって次の二点を指摘しなければならない。

第一、『資本論』第一部、冒頭の「商品」の構造分析が行われている個所で「商品」との対比において、いわば間接的にはあるが、資本主義以前の諸社会においては社会の「富」がそれと原理的にまったく異なった形態規定のもとにあること、そしてそれを支える生産関係が「共同体」に他ならぬこと、が指摘されている。⁽¹⁾「社会的分業は商品生産の実存条件であるが、しかし逆に商品生産は社会的分業の実存条件ではない」。というのは、資本主義以前の諸社会においては「有用的諸労働は相互に独立的に私事として、営まれる」(傍点——引用者)ことなく、社会的分業は「共同組織」